

自由経済研究

Jiyuu Keizai Kenkyuu(Study of Free Economy)

シルヴィオ・ゲゼルの社会改革の貨幣理論

[Dudley Dillard, Silvio Gesells Monetary Theory of
Social Reform, in: American Economic Review
Vol. XXXII(June 1942), N.2, pp.348-352.]

ダッドレイ・ディラード

森野 栄一 訳

自由経済研究 第 1号、1995年 10月

Gesell Research Society Japan.

<http://grsj.org/>

シルヴィオ・ゲゼルの社会改革の貨幣理論

[Dudley Dillard, Silvio Gesells Monetary Theory of Social Reform, in: American Economic Review
Vol. XXXII(June 1942), N.2, pp.348-352.]

ダッドレイ・ディラード

森野 栄一 訳

「自由経済研究」、第1号、1995年10月

スタンプ貨幣の改革家、シルヴィオ・ゲゼルの著作に払われた注目（注1）にもかかわらず、彼の著作の論拠の統一性は明確にされていないし、満足できるほど議論されてもいない。彼の分析の理論的側面と実践的側面との関係は無視され、誤解され、歪曲されている。

社会改革家としてのゲゼルの目標は資本家的金利生活者を攻撃することであり、また資本主義を利子から解放された社会に代えることであった。自分の改革姿勢を強化するために、ゲゼルは経済理論の体系を作りだし、そこで、資源の不活用と非機能的所得の存在が金融制度の効果的運用に避けられない付属物であることを論証した。一つの全体をなす彼の理論の最重要な一局面は利子の理論である。彼の理論はその批判的側面からは、通常の貨幣システムでは、利子所得が貨幣保有の妨げに対する支払であることを示そうとの試みであることが分かる。その積極的側面からは、スタンプ貨幣の導入が”基礎利子”を排除しようとするものであること、したがって利子から解放された経済への途を開こうとする試みであることが分かる。こうした注釈をするのは、一般にゲゼルの理論が、また特に彼の基礎利子の理論がスタンプ貨幣の提起のための議論であることを指し示すためである。このことは、ゲゼルを貨幣に対する課税の提起に導く実践上の洞察が年代的にも、理論的にも、彼の理論体系に先だっていることを示せば、十分であろう。

ゲゼルの思考の実践的側面が年代的にも先だっていることを示すのは簡単である。1886年、24歳でゲゼルは貿易と小規模な工業に従事するためにヨーロッパからアルゼンチンに渡った。そこで彼は、現代資本主義発展史における最も危険なエピソードに立ち会った。1885年から1890年にいたる一大好況には長く、厳しい不況が続き、この不況はゲゼルの南アメリカ滞在中続いたのである。産業活動の挫折により、ゲゼルは投機的な金融業者やブローカー、株屋、抵当をとった金貸しに対して、強烈な憤りを感じた。直接、利子に翻弄された者の一人として、またこの金融上の墮落に憤激を感じる一人として、ゲゼルは、産業の混沌状態に責任があると考えられる集団の利害に積極的に対立していく。彼の初めての著作『社会的国家への架橋としての貨幣制度における改革』（注2）には貨幣政策に関する彼の理想の核心が含まれている。1891年から1898年にかけてゲゼルはこの他に4冊、貨幣政策に関する著作を公刊している（

注3)が、貨幣あるいは一般経済理論にとって本質的なものは見あたらない。これが彼のキャリアを形成した日々であった。

1900年にゲゼルがヨーロッパに戻り、スイス及びドイツに居を定めたとき、彼の実践的な提起はすでに明確な形をとっており、その本質的な部分はすべて刊行された。理論の定式化はその後で行われた。1911年、『貨幣と利子の新理論』を刊行し、そこで、社会改革の体系の理論的基礎を展開している(注4)。

年代記とは別に、ゲゼルの綱領と彼の経済理論との関係を論理的に示すには、いっそう詳細な議論が必要である。なによりも、彼の綱領がその姿勢を誤解させる源であったからであり、また、問題がかなり込み入った性格のものであったことにも幾分、原因があるからである。例えば、ケインズはゲゼルの理論と綱領の関係を転倒させた。ゲゼルの利子理論を議論するなかで、ケインズはゲゼルが「彼をかなり遠くにまで・・・よく知られたスタンプ貨幣の規定に導くまで、その理論を進めた」と述べている(注5)。ケインズは、ゲゼルがその理論の”大きな弱点”にもかかわらず実践上の提起にたどりついたという印象を示唆している。ところが事實は、より正確にいうならば、ゲゼルの理論はそのいくつかの重要な側面において彼の実践上の示唆の十分な説明ではない。彼の理論は、富の保有者がこれを消費可能な富あるいは生産的富の形態に費やすよりも貨幣で保有したいという性向を相殺してしまうような周期的課税の方法で、貨幣を強制的に流通させるべきであるという自分の洞察を洗練化したものである。

利子が貨幣”保有”の妨げに対する報酬であるとのゲゼルの主張は、彼の利子理論を他の社会主義者の”搾取”の教義の部類に入れることになる。彼は、利子によって表される社会的な総所得を、産業資本家を含む労働者が作りだした所得からの控除とみなしている。しかしながら、彼の利子理論はマルクスの搾取理論と同じものではない。ゲゼルの姿勢は反古典派であるとともに反マルクスである。彼は社会主義者を自認し、全体としての資本主義が攻撃されねばならないと述べているけれども、その反資本主義の姿勢は、”利子搾取システム”という彼の資本主義の定義で解釈されねばならない(注6)。この文脈で、ゲゼルの姿勢はゴットフリート・フェダーに似ている。彼は1923年に国家社会主義者党の教義問題の最終審判者としてヒットラーが指名した人間である。ヒットラーの有名な24点に及びリストのなかで、ボールド体で印刷された二点のうちの一つは、”Brecheung der Zinsknechtschft”すなわち”利子奴隷制の廃止”を要求している(注7)。この反金融資本的外観は重要ではあるが、ナチ党の全体主義的諸前提と、これと根本的に相違したゲゼルの自由で、なおかつ人間主義的な綱領とを同一視しないよう注意しなければならない。

どうしたら失業、経済危機、不労取得が解決されるかを説明するために、ゲゼルは利子率を三つに分類している。すなわち、基礎利率(理論的利率)、実物資本の収益率(見積利率)、貸付利率(契約利率)である。基礎利率は、時間選好や待忍、いわゆる資

本の ” 生産性 ” とはなんの関係もない純粋に貨幣的現象である。それは現実世界に存在する何物をも表さないか、あるいはすくなくとも、その存在の発現の外部に直接、存在してはいない。例えば、ゲゼルはこう言っている。「基礎利率は現在見逃されている観察に訴える。それは、観察の所産である、貸し付けられた貨幣につく通常の利子の背後に姿を隠しているからである。・・・基礎利子はそれ自体で考察されねばならないただ一つの現象であり、基本的な経済概念である。」(注8) ” 基礎利率 ” の概念とそれが示す対象との一致を検証しようと試みると、否定的な結論が生ずるのは確かである。なぜなら対象にはいかなる意味もないからである。この概念には意味があるのかどうか、正しいのか誤っているのかということは(ただちに)問題とはならない。分析のこのレベルでは事実には訴えることができないからである。

ゲゼルは ” 基礎利率 ” を ” 資本の収益率 ” すなわち貨幣以外の資産の保有者に支払われる賃貸料価格と対照することでこれを明確にしようと試みる。この収益率と基礎利率との比較で、急いでこう付け加えている。「我々は、同じ世界でこのように根本的に異なった物を、利子として示すことをやめねばならない。」(注9) ケインズがゲゼルは利子率と資本の限界効率を明確に区別していると述べたことが指し示しているのはこのことである(注10)。

この、基礎利率と実物資本の利子との区別がまた、減少する実物資本資産の収益率とコンスタントな貨幣収益率との比較にも用いられる。この方法で、ゲゼルは蓄積を抑制し、生産を妨げるのが貨幣利子率であることを指摘している。資本資産の蓄積は決して独立に決定された貨幣利子率を切り下げはしない。他方で、資本資産の蓄積は実物資本の収益率を低下させる。実物資本の収益率が(貨幣の)基礎利率以下に落ちると、蓄積は止む。投資するよりも貨幣を保有していたほうが利益を生むようになるからである。このことは、交換媒介物として貨幣を必要とする者に、(現在の)より高い基礎利率を支払うよう強いる。ゲゼルによれば、この基礎利率は、「貨幣と交換の媒介物としての貨幣代替物(為替手形、物々交換及び原始的な生産)との間の効率性の相違」(注11)に一致する。もし貨幣がそれに固有の利子率(基礎利率)をもつということがなければ、蓄積は中断なく続くであろうし、実物資本の収益率は下落し、たちまちのうちにゼロになるであろう(注12)。

ゲゼルは、スタンプ貨幣の導入がただちに貸付利子の消滅を引き起こすとは主張しなかった(注13)。このことについての彼の説明は貸付利子と基礎利子との区別で容易となる。貸付利子は、もともと、流動資産の貸し手に借り手が支払う貨幣額に言及するのに使われる。ゲゼルによれば、貸付率は、貸付が通常の貨幣によるものであろうと、スタンプ貨幣によるものであろうと、つねに実物資本資産の収益率と等しくならなければならない。スタンプ貨幣で契約した貸付は貸付資本への需要がゼロ貸付率での資本供給を上回る限り、(貸付)利子を生むであろう(注14)。ゼロ貸付率は妨害されざる蓄積が資本資産の希少性を消失させてしまうその日まで待たねばならない。

基礎利子がスタンプ貨幣の導入によって消滅するであろうと主張しながら、ゲゼルは通常貨幣の使用が生み出す結果が排除されるだろうこと、また、早晚、貸付率及びその実質率がゼロに下落するプロセスが動き出すだろうことを述べている。これが実現したとき、利子所得は消滅するであろうし、金利生活者の資本主義は終焉を迎えることであろう。

この点で、長期にわたる社会改革に関するゲゼルの理念は、ケインズの ” 金利生活者の安楽死 ” ときわめて類似してくる (注 1 5)。資本の限界効率の長期にわたる下落は、ゲゼルのいう実物資本の長期にわたる下落を別なふうに表示したものである。ケインズは、一世代か二世代の間に、蓄積が抑制されないと、資本資産のコスト超過分で収益が生み出されるほどに豊富な資本資産が生み出されると考えられる、と我々に述べている (注 1 6)。ケインズもゲゼルも純粋利子を生産手段を社会化することなしに消滅させようと主張している。新たな社会で、個人はいまだ蓄積することは自由であるが、その富は利子が付くことで自動的に大きくなっていくことはないであろう。にもかかわらず、老練な危険を冒す人々にも、新しい、不確実な企業に思い切って投資する自由があるであろうし、また成功すればその初期投資を上回る収益を手に入れるであろう。したがって、個人のイニシアティブや企ての有利性は保持されている。しかし資本家体制の非機能的所得やその他の望まれざる特質は消滅するであろう。

通常の貨幣形態をスタンプ貨幣に代えることから生ずる重大な相違は、あらゆる資源が持続的に使用されるであろうことである。新資本形成を挫折させる障害としての基礎利子は存在しない。競争的生産の ” 自然な ” 諸力が、資源が完全に使用される水準に産出高の水準を調節するであろう。これが、実践上の意義から見たゲゼルの基礎利子と貸付利子の区別の意味である。

したがって、理論家としてのゲゼルの姿勢の特色は、社会改革に向かう彼の態度の中で見いだされるべきである。改革家としての彼の一般的な姿勢を見るだけで彼の理論が理解できるのである。指導的概念は基礎利子であり、これは、ゲゼルが予測した、スタンプ貨幣の導入から生まれる経済システムの変容を受けたビヘイビアから見て意味をもっている。いくつかの側面で、彼の分析は十分に発展させられてはいない。しかし、一般に、その様式は明解である。ゲゼルの議論はなによりも彼の綱領のための議論なのである。

デラウエア大学 ダッドレイ・ディラード

注

(1) 以下を参照のこと。J.M.Keynes, General Theory of Employment, Interest and Money, New York, Harcourt Brace, 1936, pp.32, 353-58,

379 (ケインズ 『雇用、利子、貨幣の一般理論』); Irving Fisher, Stamp Scrip, New York, Adelphi, 1933, pp.60-68, and Stable Money, New York, Adelphi, 1934, esp. pp.141-

44 (アーヴィング・フィシャー 『スタンプ代用貨幣』及び『安定貨幣』); Margaret Myers, Monetary Theories of Social Reform, New York, Columbia Univ. Press, 1940,

chap.II (マーガレット・マイヤーズ 『社会改革の貨幣理論』); H.T.N.Gaitskill, "Four Monetary Heretics", in What Everybody Wants to Know About Money, New York, Knopf, 1933, G.D.H.Cole,

editor, chap.VIII (H・T・N・ゲーツキル 「貨幣に関する異端説、4種」、『貨幣について誰もが知りたいこと』所収、G・D・H・コール編の第8章); Arthur O.

Dahlberg, When Capital Goes on Strike, New York, Harper,

1938 (アーサー・ダールベルク 『資本がストライキをするとき』); Franz Haber, Untersuchungen ueber Irrtuemer Moderner Geldverbesserer, Jena, Fischer,

1926 (フランツ・ハバー 『現代の貨幣改革家の誤謬に関する研究』); Hans

Langeluetke, Tauschbank und Schwundgeld als Wege zur Zinslosen Wirtschaft, Jena, Fischer,

1925 (ハンス・ランゲリュトケ 『金利なき経済への手段としての交換銀行と消滅貨幣』)。

(2) ブエノスアイレス、1891年

(3) Nervus Rerum, Fortsetzug zur Reformation im Muenzwesen, Buenos Aires,

1891 (『事態の本質、貨幣制度における改革、続編』); Die Verstaatlichung des

Geldes, Buenos Aires, 1892 (『貨幣の国有化』); El Sistema Monetario Argentino, Sus Ventajas y su Perfectionamento, Buenos Aires,

1893 (『アルゼンチンの貨幣制度、その長所及び完全化』); Die Anpassung des

Geldes an die Beduerfnisse des modernen Verkehrs, Buenos Aires,

1897 (『現代商業の要請への貨幣の適用』); La Cuestion Monetaria Argentina,

Buenos Aires, 1897 (『アルゼンチンの貨幣問題』)。

4) これは『自然的経済秩序』に合体されている。この著作はフィリップ・パイがドイツ語第6版から英訳している (The Natural Economic Order, San Antonio, Free Economic Publishing Co.,

1936)。貨幣の部と土地の部よりなる。引用は貨幣の部から行っている。

5) 『一般理論』、356 - 57頁

6) ゲゼルの資本主義についてのよりテクニカルな定義は「貸付貨幣と実物資本に対する需要が供給を上回り、それ故、利子を上昇させるような経済条件」というものである (『自然な経済秩序』110頁)。

- 7) Gottfried Feder, Hitler's Official Programme, London, Allen and Unwin, 1934, p.40 (ゴットフリート・フェダー 『ヒットラーの公式綱領』)
- 8) 『自然的經濟秩序』 265 - 66頁。ゲゼルの基礎利子の概念はケインズの貨幣の自己利子率に類似している。『一般理論』 17章参照。
- 9) 『自然的經濟秩序』、263頁
- 10) 『一般理論』、355頁
- 11) 『自然的經濟秩序』、263頁
- 12) 自然的に希少な諸要因、すなわち土地のケースでは、ゲゼルは国有化を勧告している。
- 13) 『自然的經濟秩序』、262頁
- 14) 同上
- 15) 『一般理論』、221、376頁
- 16) 『一般理論』、220、377頁